The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
2002, Vol. 4, No.1, 257-260

ISSN 1344-7505

古代佛教文化地ガンダーラ一地域の研究

A Study on a part of Gandharan Buddhist area

パキスタン北西部スワット渓谷は佛教繁栄地としてどのような地理的、歴史的、文化的要件を持ったか。（その１）
The Swat Valley in the north west of Pakistan and its geographical, historical and cultural factors as a Buddhist cultural area

久我　篁子
Setsuko　Kuga

Abstract

Swat in Gandhara is situated at the north western mountainous area in the NORTH WEST FRONTIER PROVINCE in PAKISTAN, where we find the remains of shrines and monasteries of Buddhist practice. The period of Buddhist development in Swat was from1st to 8 th century. This essay introduces firstly Swat's geographical and geological states. Its history follows with the descriptions of Buddhist art.

Key　Words： スワット(Swat)、チベット佛教(Tibetan Buddhism)、ガンダーラ(Gandhara)、イタリア調査隊(Italian mission of Excavation in Swat)、ジャタカ本生物語(Jataka stories)

研究の目的

いわゆるガンダーラ佛教故地とされる地域はパキスタン西北部からアフガニスタン東北部にかけた広大な一帯である。佛教がどのような経路を通りつつ、どのような形で根をおろしていったのかを研究し、同地域での古代佛教の様相を解明するのが最終目標であるが、拙稿ではその一部小地域を挙げ部分研究とし全体に資することを目的とする。

スワットの地理

山岳地帯スワットは古えには仏教国ウディヤナと呼ばれ、北部パキスタン北緯34度40度，東経72度-73度の域に位置する。その北は凡そ5600㍍に達する北ヒマラヤの高峰連山に画され西はパンジュコラ河を抱くディル地方と接する。マラカンド峠の険阻を南に控え東は濁流のインダス大河で区切られたコヒスタン域となる。

スワット低地にあたる丘陵の地質構成は　フィリティック結晶石、石英質石灰岩、大理石それに白雲石である。スワット渓谷の上方山岳はプルトニック系岩の広い帯状をなすが、花崗岩、閃緑岩、斑零岩、関連巨晶花崗岩等からなっている。カラム山塊は化石堆積岩と火山岩（緑系フィライト、ホルンフェルス岩、石英岩）を含む。

スワット河は、海抜2000㍍以上の主要ヒマラヤ連山に続きカラム村近くインダス西にある高山地帯に、源をもつ。流れは二つで、東北からウショー、北西からガブラルの支流が合流、 4000から5400㍍の高度を南に向け、上スワットからパンジュコラ渓谷を西へと流れ、最後にカーブル河に注ぎ込む。

スワット峡谷の冬は、霜と雪で凍てつき、雨に見舞われるモンスーン時期を除いて、夏は大体乾燥している。11月-３月の降雪期、７月-８月の夏モンスーン期の二期に雨が降る。年平均気温は 19度から11度、年間総降雨量は878ミリから 1011ミリである。

植物も地域によって二種類に分けられる。

1）乾灌木、樫が低渓谷地に自生してい、ポプラ、桑、野生オリーヴ、松、杉が1700- 2000㍍までの地域を占める。
2）渓谷の上流高地（4500 - 5000㍍）に行くと草花類と松の種類がある。

農　業

スワット峡谷の主要農産物は、黍、小麦、大麦、砂糖黍それに平豆や芥子である。果物や野菜も種類が多い。低地及び中間地域では収穫期は二度だが、高地では一毛作である。

歴史的背景

スワットの名が現れるのは、リグヴェーダ（インド・アーリア古典）であるが、Suvastu と書かれサンスクリット語の＜良い生活＞を、ヴェーダ賦ではSapta Sindhava（七つの河を持つ土地）を意味する。ギリシャとラテンの歴史家もリグヴェーダのサンスクリット語Suvastuを思わせるSoastosという表現を用いている。佛教時代、スワットは色々な風に呼ばれたが、ウルギャンまたはサンスクリット起源を持つウディアナとも言った。

ウディアナとは庭の意で、中国や中央アジアから雪を頂くパミールやヒンズークシュの剣呑な山越えをしてきた仏教徒の目には、いかにも緑滴る庭とみえたであろう。スワットを訪れた法顕（西暦400年頃）と宋雲（520年頃）は、この土地が花咲き乱れる沃野で千を越える寺院僧坊を擁していたと記録している。しかし、白フン族の侵略で甚大な被害を被り、殊に低地にある佛教関係建物は壊滅同様だった。その後630年頃中国僧玄奘が訪れているが寺院は殆ど見捨てられていると記す。

ブネール、カラカル峠を越えてきたティベット僧オルギャンの記録も同様だ。トウイッチ博士（伊）によると、1250年に スワットにきたが、その旅程はティベトからジャランダル、インドそしてスワット峡谷に至り帰路はイラム山塊からハザラ領域をぬけカシミルに達したということである。

スワットの考古学研究史

スワット峡谷の最初の調査は1926年にオーレル・スタイン博士が行い中国僧の記録によって重要な佛教遺跡を比定した。その後バーガー、ライトが調査を進め種々古代遺跡を発掘したが殊に1941のバリコット跡は大がかりだった。1964年の パキスタン政府考古博物学局との協力のもとに伊考古学局イスメオ省トウイッチ博士の指揮による詳細な発掘調査が筆頭である。

先ず最初にファセンナが発掘の正確な場所の比定調査を1956年に行いブトカラ１，パンル、サイデュ塔、ウデグラムでの発掘でガンダーラ美術が発見されたが、それらを概観するに、グレコ佛教美術の特にスワットでの、及びガンダーラ一般での興味ある発展段階がみられた。

過去35年の間に、同発掘事業は前史、原始時代からイスラム勃興時代までの膨大な資料を収集した。これらを検討の結果、深くかつ詳細に亘る研究成果をもってスワットの文化全体を明るみに出す日が来るのを期待する。1988年にはパキスタン、ペシャワール大學考古学部ダニ教授の許でディル渓谷の探査が始まった。同学部はスワット地区にも力を入れ、次々とガンダーラ彫刻の発掘に成功している。又、当時のスワット領主故ジェハンゼブ閣下の寛大な許可があってこそなし得た発掘であった。特に注目したいのはテシルザラケラにあるニモグラムの仏跡である。僧院群と数個の尖塔に囲まれた三基の仏塔、それにこの史跡に特有な一連の秀逸彫刻が発掘された。

ニモグラムはスワット博物館の初代館長であるI.U.レーマン氏が発見した。M.R. ムガール、N.A.カーン各氏がその発掘に従事した。 M.シャリフはU.レーマンの初期報告書に関わったが、その記録は出版されている。(パキスタン考古学No.5)

イタリア発掘団とペシャワル大學の他に、政府考古博物館局も発掘プログラムをスワットですすめ数々の貴重な情報を提供している。これ等は佛教時代史の再構成に大変役立つ。佛教時代の遺構の発見に加えて、大量の美しいガンダーラ美術品はスワットでの佛教芸術の発展段階を示唆することになる。スワット渓谷の遺跡からの発掘品はスワット美術館に展示されているが、ものによっては研究目的の為特別に保存されている。

スワットの歴史

スワットには僧院、仏塔、要塞等が平地部といわず、山岳の斜面にも遺構を残し、歴史的文化的人間活動が長期間に亘ったことを示す。古代ウディヤナ、スワットは西暦前327年にマケドニアのアレクサンダーが進軍してくるまでは恐らくイランのアケメニア人の支配をうけたであろう。アレクサンダーの名前は渓谷と関係があるのであるが、古代東イランと印度文化を繋ぐある象徴的な意味を持つ。

カーブル渓谷のナキア（まだ未発見）という所でアレクサンダーが自分の軍隊を二手に分けた。一軍はプシュカラヴァティ（現チャルサダ）に、二軍は大王自身が率いてスワットのオラ（ウディグラム）とバジラ（バリコット）に進軍したのである。そしてついにはインダス平野に侵入した。

西暦前320年、ギリシャ系最後の強国が滅びるとスワ

ットとペシャワール渓谷は印度マウリヤ朝チャンドラグプタアの支配するところとなりその孫アショカ王の時代には佛教とその仏僧団を保護するまでになった。スワット、ブネール及びその周辺地域のガンダーラ住民がこの佛教帝国下において新しい宗教に改宗したのだった。

アショカの死後マウリヤ帝国は急速に解体するが、ガンダーラは次々にギリシャ系バクトリア、パルティアそしてサカ国にと支配を受けた。

サカ国の実権は一世紀半にも及んだが、遂に同系の貴霜（クシャン）が次期の支配者となる。貴霜為政者の中でもカニシカは佛教推進を計って第二のアショカと例えられる。98年の繁栄もやがてササン朝イラン系王シャプール一世の出現によりその幕を閉じることになる。

この期にスワットは密教の重要な中心地となった。ガンダーラとは美術的にも文化的にも共通項を保持しながら、地理的に又部族的には独自のものを誇ったのだった。佛教センターの重要性は、この地がパドマサンバーバつまり第二の仏陀の誕生地であると見なされていることからも窺える。又、インドラブティ王が密教解釈書ウディアヤナピサを著したのもここである。

しかし中国僧法顕が５世紀に訪れた時は白凶奴の略奪でスワットは灰燼に帰し、佛教建築物も殆どが破壊されていた。その後ヒンズーシャヒーに支配され、更に11世紀初期にはディル地区を攻めウデグラムで領主ラジャジラをくだしたマフムドガズニがスワットに進撃した。それからはディラザックの治めるところとなり、スワットのパタン族はその地をユスフザイに委ねざるを得なくなった。

スワットの佛教

スワットは幾世紀を通じ佛教聖地として多くの巡礼者を惹きつけてきた。中国僧法顕は400年頃来て、スワット渓谷にいくつかの佛教施設があったと記す。

続いて 600年頃には宋雲が来て、タロ（ミンゴラ近くのブトカラであろう）の僧院で 6000 体もの黄金仏像を目にしたと記録している。これは、ブトカラ１祉で発掘された金まぶしの多量の仏像で確認された。７世紀には玄奘が1400もの僧院を見聞している。

ミンゴラ近くのブトカラ大僧院を訪ね、マジャン（旧チュルライ）の近くのティラットでは、現在はスワット博物館に展示してある仏足跡を発見した。ミンゴラ東15キロの地域ジャハンアバッド（旧シャクライ）では巨岩に仏陀の彫りつけてあるのを見たし、ミンゴラからペシャワールへの幹線の左側にあるシャコライの仏塔についても触れている。そこには印度から象に運ばれてきた仏陀の遺骨が奉納してあると言われる。それは当時スワット王であったシャカ族のウッタラセナのところへもたらされたのであるという。スワットは常に外来者を惹きつけてやまないものがあった。周辺の色々な所から人は来たが中でもチベット人が宗教的に文化的にこの地に興味を抱いたことは特筆に値する。これには社会宗教的な幾つかの理由が挙げられる。

先ず、チベット帝国はラダックばかりでなくバルチスタン、ギルギットまでもその支配下においていた。上スワットはそれらの地に近く、文化的接触が生まれ生活様式や文化的伝統にも影響を与えられたのであった。

次にスワットの地はチベット人に常に聖域とみなされており、現在でも同じ信仰レヴェルを保っている。第二の仏陀パドマサンババの誕生の地でありその説話は多い。サンブラの楽園の地ということになっている。

最後に神秘現象の守護者といわれる荼吉尼天がこの地域に西蔵行者をひきつけてきた事実がある。13世紀前半に先ずウルギャン・パが来、記録に残っている行者として最後に知られているのはスタグス・アン・サ・パで、彼はラダックのヘミス僧院を創設した。これら行者は旅行記を残している。

トウイッチ博士によると、スワットに小乗仏教をもたらしたのはアショカ王の勅使であったという。ところが、帝国印度地誌辞典では佛教はＢＣ326年アレクサンダー大王侵入時に、既にスワットにあったと解説している。アショカはこの新信仰を大いに奨励した。マルダン近くのシャバズガリやハザラのマンシェラにある岩石勅碑が阿育王の信仰の深さを物語る。この地に佛教が到来し、佛法がウディヤナに広く敷衍されるに及んでスワットの幾箇所かの地域は釈迦が金剛神をつれて南西への旅に出たその地だということにまでなっている。佛教がアショカによってもたらされたという考えは、カニシカ治世時に確立したものである。大伽藍が建ち並び、地域によってはジャタカ本生物語に結びつけて聖域化した。面白いのはティラットにある　仏足跡である。ジャル村近くの河を釈迦が渉りそこにあった大きい岩の上で衣を干したといわれている。

後に、ウディヤナは大乗仏教の中心地として有名になるが、７世紀から８世紀にかけて、小乗大乗の次に来る第三派として知られる金剛教つまり密教が盛んになってくる。スワットへ西蔵、中国の巡礼者が来た。精霊や悪魔の神秘的魔術的伝説説話が豊富である。スワット為政者インドラボティ王は彼自身が大魔術師でありウディ

アナピサというタントリック解説書を著したと言うことである。このインドラボディ及びラジュウパラの時代のスワット王国は、印度亜大陸に於ける有名な四大密教聖地の一つウディヤナ　ピテヤとして栄えた。

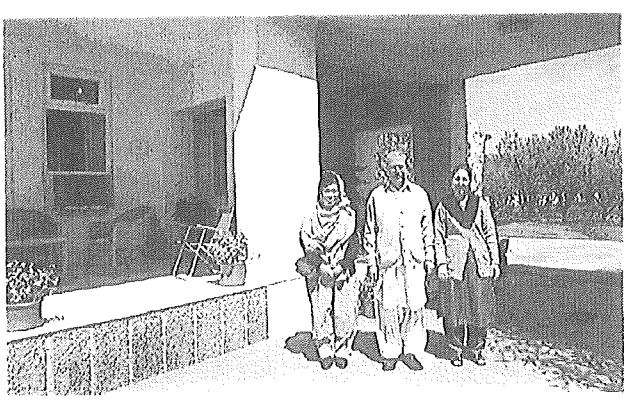
ヒンズーシャヒーがこの地に支配権を握ってから佛教は再びスワットに戻ってくることはなかった。そして11世紀の初めにはイスラム勢力ガズナ王朝の初代王マフムードがヒンズーシャヒ最後の首領ラジャジラをウデグラムに降ろし、以後　スワットはイスラムの地となるのである。

むすび

スワット紹介の一部を終えた。アフガン問題で悩みを抱えているパキスタンであるが、西接するディル地区を経て当地にも不法難民が入っている。ガンダーラ域にありながら東西を結ぶ要路を少し北に外れ、山岳地域での発展特徴もみせるユニークな佛教文化を持ったスワットである。

まだ考古学調査の方法が今日程に確立していなかった頃1925年に英人探検家オーレル・スタイン卿がアレクサンダー王の東征戦役（BC326-325）中最も有名なアオルノスの岩の砦を発見せんとて異常な情熱を持って踏査した地でもある。血気にはやる部族間の闘争は絶えず、長く危険地帯のレッテルをはられていたが族長の中で人格高いミアングール・バードシャーが出, 全域を平定、20世紀半ばから旅行も可能になった。

パキスタン全土がイスラム教徒であり、佛教信仰のかけらもないとされるが、このスワットを経て西北のチトラルへそしてヒンドゥクシュへさしかかる険しい山間のそのあたり、土着信仰やイスラム教と混合した形ながらも、佛教の跡が残っているのではないかと、研究者として夢見る。精悍なパシュトー族が住民の大部をしめるスワットの南関マラカンド峠ではタリバンを助けようと義勇兵を出した村民達が、義勇兵が戦地から戻らないのを嘆いて、怒りのぶっつけ先として見かける外国人を襲うという極く最近のニュースに心を痛めながらもスワットでの研究を続けたく、つぎの案を練っている。



写真はスワット部族長の末裔アメイルム夫妻である。穏やかで優雅な人達である。(向かって左側が筆者)

参考文献

Callieri P.F. Excavation & Research in the Swat Valley Saidu Monastery ISMEO Rome 1984

Errington E.& Cribb J. The Cross Roads of Asia The Ancient India and Iran Trust 1992

Faccena D. 1) A Guide to the Excavations in Swat (Pakistan)(1956-62) Rome 1964

2)Sculptures from the sacred area of Butkara1

3)Butkara 1 (Swat Pakistan)1956-1562 ISMEO Rome 1980-1981

Ingholt H. Gandhara Art in Pakistan New York 1957

Inyat-Ur-Rehman 1)Swat Excavations Pakistan Archaeology No.5,Karachi 1989

2)Buddhism in Swat and its impact. South Asian Studies Vol. 6 Lahore 1989

Kureshi-K.U. A Geography of Pakistan Karachi 1964

Khan Muhammad Ashraf Preliminary report on the archaeological excavations of Buddhist sites in Swat N.W.F.P 1991

Gandhara Sculptures in the Swat Museum

Sehrai F. The Buddha story in the Peshawar Museum Peshawar 1988

Tisso F. GANDHARA Paris Librairie Adrien Maisonneuve 1985

中村　元　　原始仏教から大乗仏教へ　中村元選集第20巻　春秋社　1994

佛教美術に生きる理想　中村元選集第23巻　春秋社　1995

樋口　隆康　シルクロード考古学　宝蔵館　1986

栗田　功　ガンダーラ美術１　東京二玄社　1988

栗田　功　ガンダーラ美術１１　東京二玄社　1990

岩波佛教辞典　岩波書店　1999